
転生先は...ヘタリアの世界!?

翠風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生先は…ヘタリアの世界！？

【Nコード】

N2776Y

【作者名】

翠風

【あらすじ】

交通事故で死んだ少女：時鐘 聖羅。だが、彼女が死んだのはどうやら間違いだっらしい。死後の世界で不思議な光にそう知らされる聖羅。そして光は聖羅を別の世界へ転生させてくれると言った。その後、転生した彼女がいた世界はなんと国が擬人化されたあの世界だった！？しかも、あの兄弟の妹！？ お話は基本アニメ沿い&ほのぼののです。作者は初心者です。また、亀更新になると思います。どうか温かい目で見守り下さい。

プロローグ？（前書き）

初心者で駄作者の人間の書いた駄作品で良ければ、お読みください。

ブローグ？

……ここはどこだろう？

気がつくとは私は一人で倒れていた。周りを見渡すと、そこは何もない真っ白な空間だった。取り敢えず、何かないか見るために体を起こしてみる。

私『痛たたた…』

どこかでぶつけたのだろうか？頭がガンガンする。まだはつきりしない頭で何があったのか考える。しばらくして、カチツと頭の中で全てのパズルのピースがはまる音がした。そして私は全てを思い出した。ああ、そうだ私は…

私『私は死んだんだ…』

何もない空間に少女の澄んだ声だけが虚しく響いていた。

あの日はいつも通りに普通に学校へ行き、普通に>家<へ帰っていた。>家<と言っても孤児院だが・・・。

10歳の時に交通事故で両親を亡くした私にとって、孤児院は家同然だ。

まあそんなことはさておき、つまりあの日、私はいつもと何ら変わらないう1日を過ごしていた。

紗弥加「もう本当、テストって嫌だよねー。」

琴美「だよねー。聖羅はどう思う?。」

私「私?私はそうでもないけどな。」

二人「ええー!?!?。」

私「そんなに驚かなくてもいいじゃん!。」

…とまあ、他愛もない話をしながら友達と下校していた。ちなみに、紗弥加と琴美は同じ孤児院で一緒に住んでいる家族だ。

私「あつ、ごめん!私、今日本屋によって帰るから、先帰ってて。」

紗弥加「んー?何買うん?。」

琴美「分かった!ヘタリアでしょ!。」

私「正解。」

紗弥加「そっか！そういえば聖羅、まだ買っていないんだっただね。」

私「うん。」

琴美「ヘタリアって言ったら、やっぱりツンデレ紳士でしょ。」

聖羅「…イギリスさんのこと?」

琴美「Yes!」

琴美が親指を立てて答える。

紗弥加「何いきなり英語使ってたよ！それにヘタリアと言ったらハンガリー姐さんだろ！！（ベシッ）」

そんな琴美に紗弥加がすかさず、ツツコミを入れる。

琴美「痛っ、叩かなくてもいいじゃん!!」

紗弥加「だって、うざかったんだもん」

琴美「うわーん、聖羅ー（泣）」

琴美は半泣きになりながら私に抱きついてきた。

私『えーっと…。よしよし。』

私も琴美の頭を撫でてあげる。

紗弥加「てめっ、私の聖羅に手え出すんじゃないよ。」

そう言つと、紗弥加は琴美を私から引き剥がした。

琴美「ブー。…そういえば聖羅、本屋は？行かないでいいの？」

私『あっ…、そうだった。じゃあ、2人ともまた後で。』

琴美「OK」

紗弥加「了解。」

私『ばいばい。』

二人「バイバーイ」

それから私たちは別れた。それが永遠の別れになるとも知らずに…。

私『よかつた、まだ特装版残つてて。』

私は二人と別れた後、すぐに本屋へ行き、ヘタリアの最新刊を買っていた。

私『ん？あの車、やけに速いな…。』

今は、歩行者用の信号は青。車用の信号は赤である。にもかかわらず、向こうから来る車は一向に減速する様子はない。

私（もしかしてあの車、信号無視する気なんじゃ…）

そんなことを考えていると、隣を8歳くらいの女の子が走って行った。車には気付いていないようだ。

私『！？・・・危ない！！』

私は思わず女の子の所へ行き、その子を突き飛ばした。そして私は車に跳ねられた。

私『っ…！？』

跳ねられた私の体は勢いよく宙を舞う。女の子は無事だろうか？
そう思い、私はあの子の姿を探す。

いた。…どうやら無事のようにだ。

よかった…
私

こんな状況なのに、私は安堵の息をつく。私はそのまま道路に叩きつけられた。だが、痛くはなかった。

私（体が麻痺して、感覚まで駄目になったかあ…）

なに冷静に状況を整理してるんだろう、と我ながら呆れる。

私（あゝあ、皆悲しむかな。特に紗弥加と琴美は…）

私は麻痺してうまく動かない腕を何とか動かして、最後に皆へのメッセージを書いた。…もちろん、私の血で。

私『…書け…た…。最後の一字を書くと、私は意識を手放した。

もう動かない少女の手の近くには赤い字ででこう書いてあった。

「ありがとう」

と…。

そして、現在に至る。

私『これからどうすればいいんだろう…』

最初に言ったようにここには何も無い。私の推測が正しければここは死後の世界というものだろう。ただ…。

私『てつきり神様でも居ると思ってたんだけどな』

誰もいない。

私『……よし。』

なんだか落ち着かないので、歩き回ることにした。もしかしたら誰かに会えるかもしれないし。

私『本当に誰もいない…。』

あれからしばらく歩いてみたが、相変わらず真っ白な空間が広がっている。

私『さすがに気が滅入るよ。』

私はその場に座り込んだ。

? ? > …… す…… ない。私『! ?』

いきなりどこからか声が聞こえた。

私『…一体どこから?』

周りには誰も……あ、いた。というかあった。

??>…すまない。<

私の目の前には金色に輝く光が浮かんでいた。
光?>すまない。<

確かにその声は、私の目の前に浮かぶ光から聞こえていた。

私『なんで謝っているんですか?』

光がしゃべってることに驚くも、私は疑問に思いその光に問いかけた。

光?>そなたはまだ死ぬべき人間ではなかったのだ…。<

私『?』

私は光?さんの言っていることが分からず、頭に?を浮かべる。

光?>その…つまり、本来死ぬべき運命にあったのはそなたが助けた子どもで（私『要するに私と私の助けた女の子の運命が入れ替わった…と?』!?!?…そうだ。<

私（なるほど。）

私『で、どうしてあなたが謝るのですか？』

私はまた問いかけた。

光？>それは、本当なら入れ替わった運命もすぐに直せば元に戻せるのだが、私が気が付いた時にはもう遅く、戻せなかったのだ…。
本当にすまない。<

少しの間、沈黙が続いた。

私『…いいえ。むしろ、ありがとうございます。』

光？>！？<

光？さんは私の言葉に驚いていたようだが、私は構わずに続けた。

私『逆を言えば、あなたがミスしたお陰で私はあの子を助けられたんですよね？だったら、私はあなたにお礼を言いたいです。…ミスしてくれてありがとう。』

私は光？に向かって頭を下げた。光？>…そなたは優しいのだな。

<

私『えっ?』

光?> 礼と言つてはなんだが、次そなたが生まれる世界はそなたのよく知っている世界にしてやろう。それと、いくつか特別な力をやるう…。<

私『どういふことですか? 私の知っている世界つて。それに特別な力つて?』

光? 「そのうち分かる。」

光? さんがそう言うとな私の体は輝き出した。

私『あのつ、あなたの名前は?』

光?> 我は生と死を管理する者の一人。まあ、人間は天使と呼ぶが。名は…ジュエ<

私『ジュエさん、また会えますか?』

ジュエ>…もし、そなたがどうしても我の力を必要とするなら、その時は手を貸してやろう。<

私『ありがとうございます。』

ジュエ>では、さらばだ。…聖羅。<

私『はい？』

ジュエ>頑張れよ。<

私『…はい！』

一瞬、一面が眩しい光に包まれた。次の瞬間にそこにはもう少女の姿はなくなつた…

ジュエ>彼女に幸あれ。<

そう言つとジュエはどこかへと姿を消した。

真っ白な空間はまた元の静けさを取り戻していた。

プロローグ？（後書き）

次は転生してすぐの話です。

プロローグ？（前書き）

転生してすぐの聖羅の話です。新しい世界で新しい家族に出会います。

ブローグ？

聖羅 side

私『うーん。ここ…どこ？』

今、私は草原（？）らしき場所の、ど真ん中に立っている。気が付いたら、ここにいたのだ。

私『それにしても、このふく…みおぼえがあるようなきが…』

今私が身に付けているものは白い服、白い帽子。そして…。

私『わたし、ちいさくなってるよね？』

そう、私は小さくなっていた。そのせいだろうか？喋りが片言になってしまう…。

私『みゆ…』。

なんか、変な声が出た。ヘタレで有名なあの兄弟みたいだ。そして、気が付いた。

私『くるんがついてる!?!』

しかも、あの兄弟の兄の方と同じ向きだ。

それからしばらく一人でウンウン唸っていると…。

??「おお、こんなところにおったのか!?!」

後ろから突然、声を掛けられた。

私『!?!』

私は反射的に近くにあつた大きな岩の後ろへと隠れる。

??「そんなに驚かなくてもいいじゃろ。」

私は恐る恐る顔を岩から出し、その人の顔を見た。

私『!?(…ローマ帝国!?)』

私は驚きながらも、何とかその人に話し掛けた。

私『おじちゃんは大それた？（まさか、そんなわけないよね？）』

そう思いながら、私は問いかけた。だが…

??「ん？ワシか？ワシの名前はローマ帝国!…お前のおじいちゃんじゃよ。

私『おじちゃんは大それたのおじいちゃん?』

ローマ帝国「そうじゃよ」

私『…………。』

ローマ帝国「…………。」

しばらく沈黙が続く。

ローマ帝国「あつ、そうじゃ!!(パチンツ)」

私『！？（びくっ）』

いきなりローマ帝国は手を叩いて、大きな声を出した。

ローマ帝国「そういえば、お前の名前を覚えてなかったの？」

私『わたしのなまえ？』

ローマ帝国「そうじゃよ。」

ローマ帝国はニコニコしながら私を抱き上げた。

ローマ帝国「お前の名前は…シチリアーノ。イタリア・シチリアーノじゃ。」

私『わたしは…しちりあーの。いたりあ・しちりあーの…』

ローマ帝国「どうじゃ？気に入ってくれたか？」

ローマ帝国は少し不安げな表情で私を見つめてくる。

私『…うん！きにいったよ。ありがとう！！ろーまおじいちゃん。』

私は笑顔で答えた。

ローマ帝国「そうか！気に入ってくれたか！！そりゃー良かった。」

ローマ帝国…もとい、ローマおじいちゃんも笑顔になった。

ローマ帝国「さてと、そろそろ行くかの？」

ローマおじいちゃんは私を自分の肩に乗せると立ち上がり、どこかへと歩き出した。

私『おじいちゃん、どこにいくの？』

私はおじいちゃんに掴まりながら聞いた。

ローマ帝国「お前さんの兄たちの所へ行くんじゃよ。」

ローマおじいちゃんは嬉しそうに答えた。

私『わたしっておにいちゃんがいるの？』

ローマ帝国「ああ、二人いるぞ。」

おじいちゃんはやっぱり嬉しそうだ。

ローマ帝国「まず上の兄のイタリア・ロマーノは南。そして下の兄のイタリア・ヴェネチアーノは北じゃ。」

私『へへ、そうなんだ。（これはもう「ヘタリア」の世界確定かな……。）』

なんてことを考えながらローマおじいちゃんと話していると、目的地に着いた。

ローマ帝国「おっ、いたいた。おい、お前たち一妹を連れて来たぞ。」

私の視線の先には、ちびたりあとちびロマーノがいた。ローマおじいちゃんに下ろしてもらい、私は二人のところへ走った。

私『はじめまして。わたしはイタリア・シチリアーノです。これからよろしくね。』

ちびたりあ「うん、よろしく。ボクはイタリア・ヴェネチアーノだよ。」

ちびロマーノ「……イタリア・ロマーノ……。よろしくだ、こんにやろー！。」

まずは自己紹介。名前を知っているとはいえ、初めて会うのでやっぱりちゃんとしなければ。

私『…ねえ、ヴェネチアーノおにいちゃん。』

ちびたりあ「なあに？」

私『ヴェネチアーノおにいちゃんのこと、ヴェニスおにいちゃんってよんでいい？』

ちびたりあ「いいよ」。じゃあボクもシチリアーノのこと、シチリアってよんでいい？」

私『うん！』

取り敢えず、ちびたりあとは仲良くなれた。

ちびロマーノ「……。」

そんな様子をちびロマーノは羨ましそうに見ていた。

私（あつ…ちびロマーノがいじけてる。）

私『ロマーノおにいちゃん!!』

ちびロマーノ「!?(びくっ) なっ…なんだこんにやろー。」

私『えへ…。ロマーノおにいちゃんとわたしのまえがみつておそろいだね。』

ちびたりあ「あつ、ほんとだ! いいな。」

ちびロマーノ「なっ…、べっ、べっにつれしくなんかねーぞこんにやろー。」

そう言いながらも顔を真っ赤にして嬉しそうなちびロマーノ。

私(良かった。機嫌が直って。)

私『あらためて、これからよろしくね。ヴェニスおにいちゃん! ロマーノおにいちゃん!』

それから三人で遊んだ。

そんな様子をローマ帝国は眩しそうに見つめていた。

私『ローマおにいちゃん!!』

私はおじいちゃんに飛びついた。

ローマ帝国「おっと。」

さすがローマ帝国。私を上手く受け止める。

私「おじいちゃんもいっしょにあそばーよー!!」

ローマ帝国「よし、分かった!じーちゃんが遊んでやろう。」

それから私たちはたくさん遊んだ。

そして私の新しい生活が始まった。新しい家族と共に……。

プロローグ？（後書き）

次の話はオリジナルキャラの設定です。

設定（前書き）

オリジナルキャラ達の設定です。
かなり高い確率で、編集し直すと思います…。
すみませんm（＿）m。

設定

設定

転生前

名前：時鐘 聖羅

誕生日：3月17日

年齢：16歳（早生まれなので高校2年生）

容姿：>しにがみのバラッド。<のモモを黒目、黒髪にした姿。男女どちらからも可愛がられていた。

身長：162.5cm

性格：優しくて、真面目。頭が良い。運動神経は中の上くらい。天然で、ものすごく鈍感でもある。少し人見知り。オタクだが、普段は隠している（いわゆる隠れオタク）。ヘタリア大好き。ボカロも大好き。腐ってはいない。

転生後

名前：イタリア・シチリアーノ

国名：イタリア（シチリア半島）

基本、皆からは「シチリア」か「シシリー」と呼ばれている。シ

チリア半島は、イタリアの地図を長靴の形として見たときに、長靴の先端にあたる所。

誕生日：3月17日

容姿：見た目は転生前と同じだが、髪と目は栗色になり、くるんがついた（ロマーノと同じで右）。服もロマーノのと同じ軍服。

身長：162.8cm（少し伸びた）

性格：基本は転生前と変わらない。だが、イタリア化して人見知りが直った。兄たちとは違いヘタレじゃない。むしろしっかりしている。お酒を飲むと、性格が変わる…。キレると怖い。転生してから特殊能力がついた（詳しくは本編で）。

歴史：

前3世紀：ローマ帝国の一部

9世紀初頭：アラブの領土

1130年：シチリア王国（独立）

12世紀末：プロイセン領

1268：フランス領

1282：スペイン王国領

1713：オーストリアに併合

1734：スペイン領

1800年頃：イギリスに支援されて、フランスの勢力圏外になる

1816：両シチリア王国（再びスペイン領に）

1861：イタリアに復帰

今のシチリア半島：マフィアがいる…。なのでシチリアとロマーノが協力して、どうにかマフィアを無くそうと日々頑張っている。そ

のためか、シチリアの戦闘能力はかなり高い。最近、石油が発掘されたので石油科学工業進んできている。漁が盛ん。環境はあまり良くないが、オリーブ・オレンジ・レモン・ブドウが広く栽培されている。その為、ワインやオリーブ油が作られる。

名前：桜坂 紗弥加

誕生日：7月21日

年齢：17歳（高校2年生）

容姿：黒目、黒髪 of 純日本人。髪は肩くらい。顔立ちが整っており、美人。

身長：165.3cm

性格：ツツコミ。姉御肌。運動神経抜群。8歳の時に孤児院に来た。オタク。ハンガリーに憧れている。

名前：琴美・K・レクサス

誕生日：9月24日

年齢：17歳（高校2年生）

容姿：瑠璃色の目に、茶髪のハーフ（母は日本人、父はアメリカ人）。髪はロングで、普段はツインテールにしている。

身長：158・7cm

性格：甘えん坊。ボケ。

6歳の時から孤児院にいる。オタク&微腐。ボケなのに頭が良い。
ツンデレキャラが大好き。

名前：ジュエ・B・セラフィム

年齢：??（見た目は20歳前半くらい）

容姿：基本は光の姿。たまに人の姿になる。人の姿の時は>テイル
ズ オブ シンフォニア<のクラトスの姿になる。翼の色は純白。

身長：178・6cm

性格：真面目。ストイック。穏やか。

設定（後書き）

次はアニメ第一話であった。世界会議のお話です。

第一話 世界会議 & 1 t ; 会議は踊る！ & g t ; (前書き)

アニメ第一話の世界会議です。

第一話 世界会議 <会議は踊る！>;

シチリア side

アメリカ「よし！これから世界会議を始めろ。世界中の問題をみんなで一っつ解決していこうじゃないか。難しい問題もオレたちが力を合わせれば、きつといい方向に行く！君たちの率直な意見をぜひここで聞かせてくれ。」

私（よく息が続くな…。）

現在私は世界会議に参加している。ちなみに、私の席はローマノお兄ちゃんとヴェニスお兄ちゃんの間だ。

アメリカ「じゃあまずオレからいくぞ。今話題の地球温暖化だけでつかいヒーローをみんなで作って地球をガードしてもらえばOKだと思っただよ！ちなみに反対意見は認めないぞ」

日本「私はアメリカさんの意見に賛せ（スイス「またか日本！自分の意見をはっきり言え！！」」

イギリス「俺は反対だ。そんな現実味の無い案受け入れら（フランス「じゃあお兄さんはアメリカとイギリスに反対ってことで」どっちだよ！！」

ベシベシッ、ポカポカ バシッ

只今、フランス兄さんはイギリスさんとアメリカさんに叩かれています。

中国「またあるか。お前らいつまで経つてもガキのままじゃねえあるか。少しは大人になるよろし。菓子やるからこれでも食って落ち着けある。」

中国さんが三人を止めようとしては…。

イギリス・フランス「それはいいらない。」

断られてしまいました。

スペイン「なあ、ロシアは何か意見言わんの？なんかあいつら言いだってやれや。」

ロシア「え？僕？僕は…リトアニアが困って困って僕に泣いて懇願する姿が見たいな。」

リトアニア「……………。（ガタガタ）」

ロシア「ラトビアだってそう思うよね？」

ラトビア「……………」。（ガクガクガクガクガク）

私（ロシアさん…。ラトビア君、ものすごく怯えています。ベラルーシさんも脅さないで下さい。）

二人を止めようと思い私は口を開こうとした。でも…。

エストニア「ロシアさん。弱い者いじめは良くありませんよ。」

エストニアさんに先を越されてしまった。

ロシア「わゝ。君それすごくムカつくよゝ」

ポーランド「そこまでだしー。これ以上近よると、ポーランドルール発動でお前の首都がワルシャワになるしー。」

ポーランド君はリトアニアさんの前に立ち、ロシアにさんにそう宣言していた。

私（ポーランド君はリトアニアさんと本当に仲がいいなゝ。）

ワーワーギヤーギヤーワーワーワーザワザワゲシバタバ
タドオーン

ドイツさんがふるふるしてきました。しかし、騒ぎが収まる気配
は全くありません。

私（まずいかも…。）

私『ねえ、ロマーノお兄ちゃん。』

ロマーノ「？何だ？」

私『耳ふさいでた方が良くかも。』

ロマーノ「は？」

私『私の予想では、もうすぐドイツさんの堪忍袋の緒が切れると思
うんだ。』

ロマーノお兄ちゃんは一瞬、何を言っているんだ？という顔をし
たが、少しして私の言った言葉の意味が分かったように「ああ。」
と言って耳をふさいだ。

イタリア「ヴェー？なんで兄ちゃん耳ふさいでの？」

ロマーノお兄ちゃんが耳をふさいだのを不思議に思ったヴェニスお兄ちゃんが話し掛けてきた。

私『ヴェニスお兄ちゃんも耳ふさいでた方がいいよ。』

イタリア「ヴェ？なんでなんで？」

私『すぐに分かるよ。』

イタリア「？？分かった」。

そう言つと、ヴェニスお兄ちゃんも耳をふさいだ。そして私も。

私（ドイツさんが怒鳴るまであと…3、2、1、0）

ドイツ「お前ら黙れ！！」

まるで私のカウンタダウンが聞こえてたかのように、丁度いいタイミングでドイツさんが怒鳴り出した。耳をふさいではいたが、私たち3人は共にびくつ、となつてしまった。

私『はは…。さすがドイツさん。耳をふさいでたにもかかわらずこの迫力。見習いたいな…。』

イタリア「ヴェ！？ダメだよシチリア！ドイツみたいになっちゃやだー。（泣）」

ロマーノ「そうだぞ！あんなジャガイモ野郎を見習うんじゃねー。
（怒）」

お兄ちゃんたちは二人共慌て出した。

私「わ、分かったから二人共落ち着いて。ドイツさんの話聞こう？
ね？」

イタリア「…うん。」

ロマーノ「ちっ、…ああ。」

ドイツ「……意見したいやつは明確なデータを最初に提示しろ！
話はそれからだ！一人持ち時間は8分厳守！時間切れも私語も一切
認めん！さあ、最初に発言するやつは覚悟を決めてから手を挙げる
ように。」

ふわふわ

私は隣…ヴェニスお兄ちゃんが手を挙げる気配を感じた。

ドイツ」では発言を許可する。…イタリア!」!

イタリア」……パースタ~~~~~」

第一話 世界会議 & l t ; 会議は踊る！ & g t ; ; (後書き)

次はWW?でイタリアとドイツが会合のお話です。

第二話 WW? 〳全てはここから始まった?〳(前書き)

イタリアとドイツが出会います。
シチリアの出番が少ないです…。

第二話 WW? 〳全てはここから始まった?〳

ドイツ side

時はWW?

俺はかのローマ帝国の孫、イタリアの国境を越えていた。だが:

俺「...おかしい。」

俺の手の中にあるのは銃...ではなく、

俺「木の棒一本で楽々国境を越えてしまったぞ...。」

そう、ただの木の棒であつた。

俺「まさかこんなヴルストを食う余裕がある国境越えは初めてだ。敵を見かけてもそそくさと何処かへ行ってしまうし...。これは夢か? いや、しかし油断はできん。やつのことだ、きつと策を練ってあるに違いない。」

俺は周りを警戒しながら森をずんずん進んでいった。

俺「ん？」

場所は変わってシチリア半島

シチリア『ふう、やっと2 / 3が終わった。』

シチリアの机の上には書類の山が二つできていた。

シチリア『ヴェニスお兄ちゃん大丈夫かな……。まさか、ドイツさんに見つかって「ボクはトマト箱の妖精だよ。」なんて言っていないよね?』

イタリアの森の中

俺「ふむ、なぜこんなところにトマト箱が?」

俺は箱を木の棒で叩いてみた。

??「うわっ!?!」

俺「!?!?うわっ?」

??「や、やあ!ボクはトマト箱の妖精だよ!
き、君と友達になりに来たんだ!!一緒に遊ぼう!!」

シチリア半島

シチリア『うん、そんな訳ないよね　さてと、早くこの仕事を片付けなきゃ。』

そう言つと、シチリアは残りの書類へと手を伸ばすのだった。

イタリアの森の中

イタリア「うわあー!ごめんなさいごめんなさい。オレ、トマト箱の妖精なんかじゃないんですー!!」(泣)

俺「!?!?!!?!?」

俺が無理やり箱を開けると、中から茶髪の優男が泣きながら謝ってきた。

イタリア「マジで撃つのだけは勘弁してください！何でもするから撃たないでー（泣。

何でもするから…何でもするからー！！」

シチリア半島

シチリア「ん？今、ヴェニスお兄ちゃんの泣き声が聞こえた気が…。
気のせい…だよな？」

イタリアの森の中

俺（いやまさか、いくら何でもこれはないよなーこれは。でもだつたらこいつは一体何なんだ？）

俺は泣きながら謝っている優男を片手で持ち、ぶら下げていた。

俺「…1つ質問がある。お前は本当にローマの子孫というやつか？」

それまでずっと「ごめんなさい」や「パスタ」を繰り返して泣いていたイタリアが泣き止んだ。

イタリア「えっ、ローマじいちゃん知ってるの？オレはローマじいちゃんの孫だよ。パスタとピッツアが大好きなお茶目さんです。」

それから優男…もといイタリアは笑顔になった。

イタリア「何だお前怖い人かと思ったじゃないか。話せるじゃんか」。

イタリアはさっきまで泣いていたのが嘘のようにニコニコとした。
俺は呆れて、警戒を解きかけた。が…

俺「ハッ!？」

すぐに思い直し奴から離れた。

俺（そうか！？これは罠か！害の無さそうな顔をして隙をつくつもりなんだ…。なんて奴だ!!）

イタリア「お前とは友達になれ（ペコッ）」

俺は持っていた銃のストックをイタリアの頬に押し付けた。

俺「俺は騙されんぞ！くたばれ pasta 野郎！」

イタリア「ぎゃああえあああ！！！」

このとき俺は
この出会いが
自分の運命を
こんなにまで
変えるとは
思っていなかった…。

第二話　WW？　く全てはここから始まつた？く（後書き）

感想書いて下さると、嬉しいです。

次は、日独伊三国同盟の出前まで書く予定です。

第三話 WW? くドイツと捕虜のイタリアく(前書き)

タイトル通り、捕虜になったイタリアの話です。終わり方が微妙です。すみません…。

第三話 WW? ～ドイツと捕虜のイタリア～

それからドイツはイタリアを捕虜にした…のだが…

ドイツ「お前逃げ出す気はないのか？」

イタリア「何で？だってここご飯出るし戦わなくていいし、俺こ
こ好きだ〜。」

ドイツ「ダメだ！！兵ならばたとえ槍や火やフランス人が飛び交う
中でも、逃げ出そうと懸命な努力をするものだ。おい、聞いているの
か！？寝るな！お前を見張る身にもなれ！暇すぎるんだ！！」

ドイツが説教をしている中で、イタリアはぐで、となつて寝て
いた。

ドイツ「ほら、見てみる〜。牢屋のドアが開いてるぞ？逃げ出さな
くていいのか〜？」

ドイツは牢屋のドアを【わざと】開けた。

す〜（イタリアが起き上がる音）

ゆらゆらゝ（イタリアが外に出る音）

ぺちゃくちゃぺちゃくちゃぺちゃくちゃぺちゃくちゃ

へらへらゝへらへらゝ（イタリアが牢屋に戻って来る音）

数日後…

ドイツの部下「ドイツさん、お届けものです。」

ドイツ「ん？俺にか？特に心当たりはないのだが…。」

ドイツは部下の言葉を聞き、眉をひそめる。

ドイツの部下「はい。あなたと…イタリア宛てです。」

ドイツ「何！？」

イタリア「ヴェ？俺宛て？」

イタリアは現在、ドイツの捕虜である。そのイタリア宛ての荷物ならば、何か危険なものが入っている可能性が高い。

ドイツ「それで…誰から送られてきたものなんだ？その荷物は？」

ドイツは警戒しながら部下に聞いた。

ドイツの部下「えっと、ちょっと待って下さい。…届け主は「シチリアーノ」と書いてあります。」

イタリア「わーい シチリアからだ。」

イタリアはドイツの部下からさっさと荷物を受け取り、開封した。

ドイツ「！？貴様！何をしている！？」

ドイツはすぐにイタリアから荷物を取り上げ、中身を見た。

ドイツ「！？…なんだ？これは…？」

イタリア宛ての荷物の中には…

- ・パスタ
- ・サッカーボール
- ・ワイン
- ・トマト
- ・オリーブ油 など

と手紙が入っていた。

ドイツは手紙を手に取り、読んだ。

ドイツ「えー、なにになに…」

>ヴェニスお兄ちゃんへ

お元気ですか？私は元気です。この前会ったときに頼まれたボールやパスタを送ります。早く帰って来てね。あんまりドイツさんに

迷惑かけちゃダメだよ。
シチリアーノよりく

…この前？」

イタリア「やったー。パスタパスタ トマトトマト」

イタリアはドイツが手紙を読んでいる間に、荷物を取り戻していた。

ドイツ「…おい。」

イタリア「はあひ（なあに）？」

イタリアは早速、送られてきたトマトを食べていた。

ドイツ「>この前会ったときとはどういうことだ？」

イタリア「（モグモグ、ごくん！）うん、この前ドイツが俺を外に出してくれた時に会ったんだよ。俺のこと助けに来てくれたみたいだったけど、ここ居心地がいいからこのまま残る、と言って帰ってもらったんだ。」

ドイツ「何だと！？…というかそれなら普通、一緒に逃げるだろ！」

イタリア「だって俺ここ好きだもん」

ドイツの突っ込みに、イタリアはニコニコと笑いながら答えた。

ドイツの部下「あの…お取り込み中のところすみませんが、ドイツさん宛ての箱はどうでしょうか？」

ドイツ「ああ…待たせてすまなかったな。そうだな、取り敢えず受け取っておく。」

ドイツは部下から箱を受け取った。

ドイツの部下「では、失礼しました（ビシッ）」

ドイツ「うむ。（ビシッ）」

ドイツとドイツの部下はお互いに敬礼を交わした。そして、ドイツの部下は牢屋をあとにした。

ドイツ「ふむ、どうしたものか…。」

ドイツは腕をくみ目の前の箱を見つめた。

ドイツ（やはり危険物の可能性があるから開けずに捨てるべきなのか？いや、でも危険物ならそれはそれでどうにかしなければいけない…。）

ドイツ「…よし。」

ドイツは箱を開ける決意をした。

ベリベリッ パカッ

ドイツ「！？こ…これは！？」

箱の中には

- ・胃薬
- ・頭痛薬
- ・古びた短剣
- ・手紙

があつた。

ドイツはまた手紙を手に取り、読んだ。

ドイツ「また手紙か…。なにになに…」

>ドイツさんへ

兄がお世話になっております。ドイツさんは真面目な方だと聞いたので、兄のことで色々と苦勞していると思い、頭痛薬と胃薬を送りました。あと、短剣は私達の祖父である「ローマ帝国」<が使っていた物です。ドイツさんは祖父を尊敬していると耳にしたので同封しました。良かったらどうぞ。兄を宜しく願います。
シチリアーノより<

>ローマ帝国が使っていた短剣くだと!?!これが…。」

ドイツは古びた短剣を手に取り、じつくりと眺めた。刃渡りは約15cm。古びてはいるが、きちんと手入れされていたのだろう。刃は欠けておらず、切れ味は良さそうだ。

イタリア「あつ!それローマじいちゃんのだ。」

さっきまでトマトを食べていたイタリアがドイツの持っている短剣を指さして言った。

ドイツ「何!?(ということとはこれは本当にローマ帝国の…。)」

ドイツは改めて短剣をじっと見つめる。

イタリア「あつ、そうだ!ねえドイツ、一緒にサッカーしようよ!せっかくシチリアが送ってきてくれたんだし。俺、今暇なんだ。」
ドイツも暇でしょ?やろうよサッカー!ねえねえドイツ?やろうや

ろっ
「

ドイツ「お前は…。」

ドイツは下を向き、ふるふると震えだす。

ドイツ「少しは自分の立場を考慮ろーーーーー!!」

数日後ドイツは薬を送ってくれたシチリアに感謝するのだった。

第三話　WW？　くドイツと捕虜のイタリアく（後書き）

感想やポイントもらえると嬉しいです。
次までWW？の話の予定です。

第四話 WW? イタリアの帰宅(?) (前書き)

すみません…

この話でWW?の話を終わらせるつもりだったんですが、できませんでした…。

第四話 WW? イタリアの帰宅(?)

シチリア side

私『ヴェニスお兄ちゃん…元気かなあ?』

私は机に向かい、書類から一旦目を離して呟いた。

現在ヴェニスお兄ちゃんはドイツさんの捕虜になっている。

先日、私はヴェニスお兄ちゃんを迎えにドイツさんの家へ行き、偶然にも会うことができた。でもヴェニスお兄ちゃんは「ドイツの家は居心地がいいからこのまま残る。」と言い、私はヴェニスお兄ちゃんから欲しい物を聞いたあと家へと帰ったのだった。

もちろん私はヴェニスお兄ちゃんに帰って来て欲しかったが、そうするとまたヴェニスお兄ちゃんが危ない目に遭うかもしれないと思い、しぶしぶ家へと帰ったのだ。

私『会いたいなあ…。』

コンコン…

誰かが私の部屋の扉をノックした。

私『どうぞ。』

ガチャッ

シチリアの部下「失礼します。」

部屋に入って来たのは私の部下だった。

シチリアの部下「シチリアさんに連絡です。」

私『なあに?』

シチリアの部下「あなたの兄：イタリア・ヴェネチアーノが帰って来ましたよ。」

私『!? 本当!?!』

私は机から身を乗り出して聞いた。

シチリアの部下「ええ。何でもドイツから箱に入れられて送られて来たらしいです。あと、変な歌を歌ってたらしいですよ。」

私『へ、へえ〜。(「ドイツ〜ドイツ〜ドイツはいいところだよ〜」っていうあの歌かな?)』

私はあの歌を思い出し、思わず笑いそうになるのを必死で抑えた。

シチリアの部下「今、下に居ると思うので会いに行ったらどうですか？」

私『そうだね。ちょうど仕事も一段落ついたところだし会いに行こうかな。』

シチリアの部下「では、こちらの書類は提出しておきますね。」

私『うん、ありがとう。お願いね。(ニコッ)』

シチリアの部下「／＼／＼かしこまりました。」

私『？顔、赤いよ？大丈夫？熱はない？』

シチリアの部下「だ、大丈夫です。」

私『そう？ちょっと待ってて。』

私は机の引き出しから風邪薬と解熱剤を取り出した。

私『はい。これ、具合が悪くなったら飲んでね。』

私は薬を部下に渡した。

シチリアの部下「ありがとうございます。」

彼は私から薬を受け取り、ポケットにしまった。

シチリア『じゃあ、書類お願いしてもいいかな？』

シチリアの部下「はい。」

シチリア『よろしくね。』

そう言っ、私は部屋をあとにした。

階段を降りると、ギャーギャーと騒ぐ声が聞こえてきた。

ロマーノ「……だいたいお前は何でシチリアーノが迎えに行った時に一緒に帰って来なかったんだよ！」

イタリア「ヴェ…だってドイツの家、居心地が良かったんだ。だから…」

ロマーノ「こっちはお前が居ないせいで仕事が増えて大変だったんだぞ！」

イタリア「え！？兄ちゃんが仕事？」

私『さすがに私一人じゃ無理そうだったから、手伝ってもらったんだよ。』

イタリア「！？シチリア！！」

私『お帰り、ヴェニスお兄ちゃん。』

私が笑いかけると、私の突然の登場に驚いた顔をしていたヴェニスお兄ちゃんも笑顔になった。

イタリア「うん！ただいま。あつ、そうだ！」

私『？』

イタリア「ただいまのハグ」

そう言つと、ヴェニスお兄ちゃんは私にハグをしてきた。

私『みゆ！？』

私は驚いて、思わず奇声を発してしまった。

ロマーノ「おい、シチリアーノのから離れる！驚いて固まってんだろ。」

私『……………。』

いきなりのことに私は固まってしまっていた。

イタリア「だってシチリア可愛いんだもん 兄ちゃんもそう思わない？」

ロマーノ「…………まあ…………な。」

私『（ハッ）そんなこと無いよ？あの、ヴェニスお兄ちゃんそろそろいいかな？』

イタリア「ヴェ…………。」

ヴェニスお兄ちゃん少し名残惜しそうに私から離れてくれた。

私『ありがとう。…………はあ、私もそろそろ慣れないといけないな。ハ

グに。」

イタリア「シチリア、ハグがくるのを分かってたら平気なのに、いきなりだと固まっちゃうもんね。」

ロマーノ「あと、知らないヤツとのハグもな。」

私「うん。…でも、昔はハグ自体苦手だったからマシになった方だと思うよ。」

イタリア・ロマーノ「そうだね／＼だな。」

昔は本当にハグが苦手で、異性からハグをされるといつも奇声を挙げたり、泣いたりしてしまっていた。そして、ひどいときは相手を突き飛ばしていた。そのうちの7割以上はフランス兄さんだった気がする…。

私「それにしても…。」

イタリア・ロマーノ「？」

私はお兄ちゃん達の顔を交互に見た。

私「こうして3人揃うのって久しぶりだね。」

私が言うと、お兄ちゃん達はお互いに顔を見合わせた。

イタリア「うん。」

ロマーノ「かもな…。」

最近私とロマーノお兄ちゃんは別々に仕事、ヴェニスお兄ちゃんはドイツさんの捕虜、で兄妹で集まれる機会がなかった。

私『せっかく久しぶりに3人揃ったんだし、みんなでご飯作ろうよ！』

イタリア「わ、それいいアイデアだと思うよ！ね、兄ちゃん。」

ロマーノ「…悪くはない。」

シチリア『じゃあ、決まりだね』

イタリア「パスタ作ろうよ！パスタ！！」

ロマーノ「トマト料理は絶対に外せねえな。」

お兄ちゃん達はそれぞれ自分の好きな料理を希望してきた。

私『なら…ボロネーゼなんてどうか？』

ロマーノ「いいぞ。」

イタリア「シチリアは何が食べたい？」

私「私？私は…カッサータが食べたいな。」

カッサータとは…シチリア地方のお菓子のことです。チーズに砂糖漬けの果物などを加えたクリームと、スポンジ・ケーキで作ります。アイスクリームに仕立てたものもあります。

イタリア「それじゃあ、デザートにカッサータを作ろっか。」

私「うん」

ロマーノ「…で、材料は揃ってんのか？」

イタリア・私「あつ…。」

ロマーノ「ったく…。俺が買ってきてやるからその間にお前達は準備してろ。」

イタリア「はい」

私「ありがとう、ロマーノお兄ちゃん。」

ロマーノ「ふん…。」

それから、ロマーノお兄ちゃんは材料を買いに行き、私達は準備をした。

お兄ちゃんは1時間程で帰って来た。

私『お帰り、ロマーノお兄ちゃん。』

ロマーノ「ああ、ただいま。…？おい、ヴェネチアーノはどうした？」

私『えーと…ヴェニスお兄ちゃんはその…準備が終わったから、シエスタを…。』

ロマーノ「はあ！？…この、ふざけやがって！あのバカ弟ー！ー！」

私『え！？ちよつ、ロマーノお兄ちゃん！？』

その後、ヴェニスお兄ちゃんはロマーノお兄ちゃんにこつてり絞られたのだった。

でも、そのやり取りもまた久しぶりで、面白かった。

夜は計画通り3人で夜ご飯を作った。

ご飯を食べる時にヴェニスお兄ちゃんは、ドイツさんの家に居た時のことを話してくれた。お兄ちゃんの話によると、ドイツさんはおじいちゃんの短剣を喜んでくれてたらしい。良かった。

私『今日は本当に楽しかったなあ。』

私は食器を洗いながら呟いた。

私（私の記憶が正しいなら、ヴェニスお兄ちゃんはまたドイツさんの家に行っちゃうんだろ…今度は出稼ぎに。）

そう思うと何だか少し悲しくなり、小さく俯いてしまった。

私^{でも}…

私は顔を上げ、小さく微笑んだ。

私（その時は帰って来たときのために、材料を買っておこうかな）

私は1人で勝手に新たな計画を立てるのだった。

第四話 WW? イタリアの帰宅(?) (後書き)

次こそWW?を終わらせます!

第五話 WW? WW? 終了! ドイツと友達に (前書き)

久々の更新です!!

長い間、放置してすみませんでした。 > (| (<

第五話 WW? WW?終了!ドイツと友達に

三人称 side

前回の話でイタリアは（ドイツから強制送還され）帰宅したが、今度は出稼ぎのためにドイツの家へ行ったのだった。それから数日が経ったある日のこと

イタリア宅

シチリア『ロマーノお兄ちゃん!』

シチリアは勢いよくロマーノの部屋のドアを開けた。

ロマーノ「おわっ!?!いきなり入って来るな!びっくりしただろ
うが。」

シチリアはドアをノックせずに開けたので、突然ロマーノの前に現れる形になり、ロマーノはとても驚いていた。

シチリア『あつ……ごめんなさい。』

ロマーノ「ったく……で、どうした？シチリアーノ。」

シチリア『うん。あのね、ヴェニスお兄ちゃんから手紙が届いたよ。』

ロマーノ「バカ弟からか？」

シチリア『バカって……（汗）バカは外そうよ、バカは。』

ロマーノ「……ちつ、分かったよ。」

シチリア『ありがとう。……じゃなくて、ドイツさんの家に出稼ぎに行ったヴェニスお兄ちゃんから手紙が届いたんだよ！一緒に読もう。』

シチリアは持っている手紙を嬉しそうにヒラヒラとロマーノに振って見せた。

ロマーノ「ああ。」

シチリアの無邪気な笑顔と行動にロマーノは小さく微笑み、頷いた。

シチリア『じゃあ、読むね。えっと、なになに……』

>兄ちゃんとシチリアへ

俺、ドイツの家でお札作る仕事始めたよ。

聞いて驚くなよ！<『

俺の給料は9億マルクです。

あつ、でも卵が32億マルクです。

びつくりだよね〜！！<

.....。『

ロマーノ「.....。」

シチリア『.....。』

ロマーノ「...あのバカ！！やっぱりあいつはバカ弟だ！！どう考えてもおかしいだろ！！（怒」

シチリア『はは.....（苦笑』

イタリアからの手紙にロマーノは怒りながら突っ込み、シチリアは苦笑していた。

シチリア『というかドイツさん、ヴェニスお兄ちゃんに仕事くれたんだね。またドイツさんに薬、送っておくかな...。』

シチリアはイタリアに振り回されるドイツを想像した。

シチリア『ドイツさん大丈夫だよな?.....大丈夫、かな?』

だが結局、シチリアはドイツに前にも送った頭痛薬と胃薬のセツトを送ったのだった…。

それから色々あって、イタリアとドイツは同盟を結び友達になった。

イタリア「ドイツードイツー!!」

イタリアは街を歩いているドイツを追いかけ、後ろから声を掛けた。

ドイツは「はあ…」と大きく溜め息をつきながら振り返った。

ドイツ「何だイタリア?まさか、また靴ひもが結べないとか言い出すんじゃないだろうな?」

イタリア「きよ、今日は違つよ！あのね俺、ドイツに紹介したい人がいるんだ」

ドイツ「俺に紹介したい人？…で、そいつは何処にいるんだ？」

イタリアの近くには誰も居ない。ドイツは少し嫌な予感がした。

イタリア「え〜つと、はぐれちゃった」

ドイツ「…はあ？」

イタリア「可愛い女の子がいたからナンパしてたらいつの間にか居なくなつてたんだ〜。どうしよう？」

イタリアはニコニコて笑いながら首をかしげてドイツを見た。

ドイツ「…因みにその時、お前は前と後ろどちらを歩いていた？」

イタリア「うしろー」

ドイツ「ならば、それはそいつが居なくなつたんじゃないかってお前が居なくなつたんだろ！！」

イタリア「ヴェー！？ごめんなさいごめんなさい！！何でもするから怒鳴らないでー！！」

泣き出すイタリア。

??『ヴェニスお兄ちゃん!!』

ドイツ「ん?」

ドイツがイタリアに説教をしていると、栗色の髪と瞳の少女がイタリアの元へ走ってきた。

??『ふう…良かった、見つかった。』

イタリア「シチリア〜!」

ギュッ

イタリアは半泣きのままシチリアに抱きついた。

シチリア『?…よしよし。(なでなで)』

シチリアは何故イタリアが泣いているのか分かっていないようだったが、苦笑しながらイタリアを宥め始めた。

シチリア『それにしても驚いたよ。ヴェニスお兄ちゃん、気が付いたら居なくなってるんだもん。』

イタリア「ヴェ…。ごめんなさい。」

イタリアはショボーンとして、シチリアに謝った。

ポンポンッ

イタリア「ヴェ？」

シチリア『まあ、こうして会えたんだからそんなに落ち込まないでね？』

イタリア「…うん！ありがとう、シチリア」

ドイツ「……………」

イタリアとシチリアが会話をする中、ドイツは一人だけ蚊帳の外に置かれていた。

イタリア「あつ、そうだ！ドイツ、紹介するね 俺の妹のシチリアだよ かわいいでしょ で、シチリア、こっちは俺達が新しく同盟を組んだドイツ。すっげーいいやつなんだよ！二人共、仲良くしてね」

シチリア『だから、かわいくないって……。』（汗） はじめまして、

ドイツさん。私はイタリア・シチリアーノです。シチリアと呼んで下さい。WW?のときは、兄がお世話になりました。』

ドイツ「ふむ、俺はドイツだ。よろしく頼む。…WW?のときに送ってくれた薬はとても役に立った。礼を言う。」

シチリア「そうですか。(ってことはやっぱりヴェニスお兄ちゃん、ドイツさんに迷惑かけちゃってたのかな…) お役に立てて良かったです。』

ドイツ「あと、その…。」

シチリア「?。」

ドイツ「…ローマ帝国の使っていたという短剣に関しても…礼を言う。ありがとう。」

シチリア「いえいえ、喜んで頂けて何よりです。』

ドイツ「しかし良かったのか? あんな大切な物を敵だった俺なんかに渡して…。」

ドイツは眉をひそめながら、シチリアに問う。

シチリア「大丈夫ですよ。だってドイツさんはプロシア兄さんの弟さんですから。』

ニッコリと微笑むシチリア。

ドイツ「…！？兄さんを知っているのか！？」

シチリアの予想外の返答にドイツは驚き、目を僅かに見開く。

シチリア『ええ。知ってるも何も私、12世紀の終わり頃はプロシア兄さんにお世話になってましたから。』

シチリアは若干懐かしむように言葉を続けた。

シチリア『あの頃はよく、プロシア兄さんに剣を教えてもらってました。…プロシア兄さん、凄く強かったです！！』

ドイツ「そうか…。」

ドイツは兄を誉められ、どこか嬉しそうだ。

シチリア『…ドイツさん。』

ドイツ「？何だ？」

シチリアはそっと右手を差し出した。

シチリア『今日から私達は友達です。これから宜しく願いますね（ニコッ）』

ドイツ「／／／あ、ああ。宜しく頼む。」

ドイツはシチリアと手を繋いだ。

ドイツ「……おかしい。」

シチリア『…ドイツさんもそう思いますか？』

ドイツ「シチリアもか。やけに静か…ではないか？」

シチリア『…「ヴェ」って声が聞こえませんか。』

二人はハッと、周りをキョロキョロと見回す。

ドイツ「イタリアが居ない!!」

シチリア『！ドイツさん、あれって!!』

シチリアが指差した方向には…

イタリア「ねえねえ、その可愛いきみ！今ヒマ？よかったら俺とお茶しない？俺、いい店知ってるんだ 行こうよ！」

女の子にナンパしているイタリアの姿があった。

シチリア『またお兄ちゃんは…。』

ドイツ「イタリアーーーーー！！」

シチリア『ドイツさん！？ちょっと、待ってくださいよ。ドイツさ
ーん！』

ドイツはイタリアの元へ猛スピードで走って行き、シチリアはドイツを必死に追いかけた。

この後、イタリアがドイツに説教されたのは言うまでもない。

第五話 WW? WW? 終了! ドイツと友達に (後書き)

次話は日独伊三国同盟ね話です。

明日、更新の予定です。

第六話 日本とドイツとイタリア兄妹と（前書き）

予定通り、更新です。

日独伊三国同盟を結びます。

第六話 日本とドイツとイタリア兄妹と

ドイツ「…というわけで俺たちの仲間になるやつらを連れて来た。」

日本「イタリア君にシチリアさん…ですか？」

ドイツ「ああ。だがシチリアは遅れて来るらしい。」

日本「そうなんですか。それは会うのが楽しみ…と言いたいのですが、さつきからそこに居るどう見ても不振人物の彼とは別人ですね？」

そう言う日本の視線の先には女性に囲まれてヘラヘラしているイタリアがいた。

ドイツはそんなイタリアを見て、眉間に手をやりながら応えた。

ドイツ「俺も信じたくはないが…あれなんだ。」

日本の家（こたつの中）

スッ（日本がイタリアの頭の上にみかんを乗せる音）

ネコ「ニャ〜ン。」

イタリア「…ヴェ〜…zzzz」

日本「あの…ここに調印したんですけど。」

ドイツ「ああ…。そこに置いておいてくれ。」

現在、イタリア・ドイツ・日本の三人はこたつに入っている。
イタリアは頭のみかんを乗せて（てか日本が乗せた）ネコと一緒に寝ており、ドイツはドイツで読書をしている。日本は調印したので、これからどうしようかと考えていた。

コンコン…。

玄関の戸が叩かれる音がした。

日本「？おや？どちら様でしょう？。」

日本はこたつから出て、玄関へと向かった。

シチリア side

私『…あれ？聞こえなかったのかな？』

私は今、日本さんの家の玄関前にいる。一度ノックをしてみたが返事がない。

私（やっぱり、日本さんの家はいいな。懐かしい感じがするし、何より落ち着く…。）

私は日本さんの家を眺めながら、ふと思い出した。

私（そういえば、紗弥加と琴美も和室の方が好きでよく三人で畳に寝転がって「ヘタリア」読んでたな…。）

私はこの世界に転生する前のことをしみじみと思い出していた。すると…

日本「あの…どなたでしょうか？」

日本さんが玄関を開けて、私に問いかけてきた。

私『えつと、こちらは日本さんのお宅ですか？』

日本「ええ、私が日本ですが…。あなたは？」

私『はじめまして。私は>イタリア・シチリアーノ<といいます。先にそちらにお邪魔している>イタリア・ヴェネチアーノ<の妹です。』

私が応えると日本さんは納得したような顔をした。

日本「ああ、あなたが…。まあ、立ち話もなんですしどうぞ御上がり下さい。」

私『あつ、はい。ありがとうございます。では、お邪魔します。』

日本さんに促され、私は家に上がらせてもらった。

それから私は日本さんに案内されて二人が居る部屋に着いたのだが…

私『……ドイツさんもヴェニスお兄ちゃんも何やってるんですか？』

部屋に入るとこたつの中でドイツさんは読書、ヴェニスお兄ちゃん

んはシエスタ、という何とも言えない光景があつた。

ドイツ「ああ、シチリア。予想以上に早かつたな。てっきり来るのは明日になると思つていたのだが？」

私「ええ、私もそのつもりだったんですが、今回のマフィアの人達は話を通じる人達だったので、ドンパチせずに鎮圧できたんです」

ドイツ「そ、そうか。それは良かったな…。（汗）」

私「はい！」

こたつに入りながら、嬉しそうに言う私を見て、ドイツさんは苦笑していた。

私「ところでドイツさん。」

ドイツ「なんだ？」

私「ヴェニスお兄ちゃんは調印しましたか？」

ドイツ「…いや、まだだ。イタリアはこたつに入るとすぐに寝てしまつてな。起こそうとしたんだが、日本が「起こしては可哀想だ」と…。」

私「…そうだったんですか。じゃあ、私が代わりに調印しておきますね。」

ドイツ「頼む。俺と日本の調印はもう済ませてある。終わったら、そこに置いておいてくれ。」

私『了解です。』

私はペンを手に取り、書類を書き始めた。

私『……………よしっ。』

私は書き終わった書類を先に調印していたお二人の書類の上に重ねた。

私（日本さんはどこに行っただろう？）

日本さんは私を案内してくれた後、何処かへ行ってしまった。探しに行こうかな、と私が思ったそのとき

日本「お待たせしました。」

日本さんがお茶とお菓子を持って戻ってきた。

日本「調印は済んだんですね。」

日本さんはお茶を配りながら、こたつの上に重ねてある書類を見て言った。

私『ええ。…あつ、ありがとうございます。』

日本「いえいえ。」

日本さんはみんなにお茶を配り終わると（ヴェニスお兄ちゃんは寝ているが）、そういえば…と私に話しかけてきた。

日本「まだ、ちゃんとした自己紹介をしていませんでしたね。」

私『そうですね。』

日本「では、僭越ながら私から…私は日本と申します。以後、お見知り置きを。」

日本さんは私に向かって頭を深々と下げた。

私『私はイタリア・シチリアーノです。シチリア、と呼んで下さい。これからよろしく願います。』

私は日本さんに手を差し出した。

日本さんは私の手を不思議そうな顔で見た。

私『握手…ダメですか？』

日本『い、いえ。そうではないんです。その…慣れてなくて。』

日本さんも恥ずかしそうに手を差し出した。

私『改めてよろしくお願いしますね。日本さん。』

日本『はい。よろしくお願いします。』

私達は握手をした。

ドイツさんはそんな私達を温かい目で見つめていた。

イタリア『…パスタ…zzz』

日独伊三国同盟締結！！

第六話 日本とドイツとイタリア兄妹と（後書き）

ずっと放置しててすみませんでしたm（――）m

掛け持ちしてる【ヘタ鬼】の小説ばかり書いてました！

それで申し訳ないんですが、これから、こっちの方の小説を放置してしまうことが多くなるかもしれません。

最低、1か月に1回は更新したいと思っています。

身勝手なことをしてしまい、本当にすみません（<――>。）

特別話 クリスマスパーティー その1（前書き）

クリスマスなので書いてみました。
100%オリジナルの駄文です。

特別話 クリスマスパーティー その1

シチリア side

今日は12月24日、クリスマスイブだ。
今年のクリスマスイブはアメリカさんがたくさんの方々をお招きして、アメリカさんの家でクリスマスパーティーをすることになった。

ざわざわざわざわ

私「わゝゝアメリカさんの家のクリスマスツリー、凄く大きい。」

私は目の前にある巨大なクリスマスツリーを見上げながら呟いた。

ロマーノ「…でけえ。」

イタリア「すげー！」

スペイン「親分、ビックリやわ…。」

ドイツ「確かに…でかいな。」

日本「……………。（カシャツカシャツ）」

お兄ちゃん達もツリーに驚き、各々の感想を述べていた。
でも日本さんだけは無言でカメラを連写している。

私『あつ日本さん後でその写真、割り増ししてもらってもいいですか？』

私はさつきからずっと写真を撮っている日本さんに話し掛けた。

日本「ええ、構いませんよ。…良かったら皆さんの写真もお取りしましょうか？」

イタリア「本当！？じゃあ俺と兄ちゃんとシチリアの三人で撮って
」

日本「はい、良いですよ。」

イタリア「わーい ありがとう、日本。さあ、兄ちゃん！シチリア
！こっちこっちー！」

ロマーノ「なっ！？引っ張るなー！！」

ヴェニスお兄ちゃんはロマーノお兄ちゃんの腕を掴んで、ツリーの
前へと走り出した。

私『ちよっ！お兄ちゃん、あんまり走ったら転け…』

ツルンッ

全員「『あっ！！』」

イタリア「ヴェッ！？」

ローマー「ちぎっ！？」

二人は見事に滑り、豪快に転け…

ドイツノ私「『イタリアノお兄ちゃん！！』」

ダッ！！

パシッ

ドイツノ私「『ふう…』」

…そうになったが、ヴェニスお兄ちゃんをドイツさんが、ローマーお兄ちゃんを私が後ろから支えたので二人共なんとか転けずに済

んだ。

三人称 s i d e

イタリア「ヴェ〜…危なかったあ…ありがとう！ドイツ！！」

ドイツ「全く…今後、気を付けるように。」

イタリア「はい」

ドイツの注意にイタリアは手を挙げて、返事をした。

シチリア「大丈夫？ロマーノお兄ちゃん？」

ロマーノ「あ…ああ。」

シチリア「良かった」

シチリアはホッと胸を撫で下ろした。

ロマーノ「……シチリアーノ。」

シチリア『？なあに？ロマーノお兄ちゃん。』

ロマーノは少しそわそわしながらシチリアに話し掛けた。

ロマーノ「…その…ありがとうな。」

ロマーノは恥ずかしそうに、シチリアに感謝の言葉を述べた。

シチリア『…ふふ、どういたしまして。』

そんなロマーノにシチリアは微笑みかけた。

じー…

ロマーノとシチリアは視線を感じて後ろを振り返った。

スペイン「ロマーノもシチリアもかわええなあ」

日本「和みますね。」

ドイツ「…ロマーノもあんな表情をするのだな。」

イタリア「ヴェ〜」

振り返ると、皆が二人のやり取りを見ていた。同時に転けそうになっていたイタリアと助けたドイツまでもだ。

シチリア『……………。(ニコッ)』

ロマーノ「…な…何見てんだ！こんにやろー！！」

視線に気付きシチリアははにかみ、ロマーノは顔を真っ赤にした。

スペイン「ははっ、ロマーノがトマトみたいになりおった」

ロマーノ「スペイン、てめー！！」

シチリア『まあまあ、ロマーノお兄ちゃん、落ち着いて。』

今にもスペインに殴りにかかりそうなロマーノをシチリアが後ろから羽交い締めにして押さえる。

ロマーノ「離せ！シチリアーノ！スペインを一発殴らねーと気が済まねえ！！」

シチリア『ダメだつて…。』

バツ

全員「『!?!?』」

突然、会場の灯りが消え、辺りが真っ暗になる。
先程までざわざわしていた会場が一瞬で静まり返る。

パツ

そして、一ヶ所だけにスポットライトが当てられた。

アメリカ「レディース&ジェントルメン――!」

スポットライトに照らされた場所には、アメリカがサンタクロースの格好をして立っていた。

アメリカ「今日は集まってくれてありがとう――!クリスマスパーティーを始めるぞ――!」

ワーワーワー
ガヤガヤガヤ

アメリカ「よし！まず始めに皆で乾杯をしよう 皆、飲み物を持つてくれ。」

皆が飲み物を手に取る。

アメリカ「…皆、持ったね？じゃあ行くぞ！…乾杯！！」

全員「カンパニー！！」

カンッ カンッ
カッンッ

あちこちでグラスのぶつかる音が響いた。

アメリカ「H A H A H A 皆、今夜は楽しんでくれ！！」

ガヤガヤガヤ
ワーワーワー

シチリア『始まったね、クリスマスパーティー』

シチリアは後ろを振り返る、が…

シチリア『…あれ？皆は？』

誰も居なかった。

その頃、皆はというと…

イタリア「パスタア~~~~」

ドイツ「待て！イタリア！勝手に行動するな！！」

日本「イタリア君、ドイツさん、待ってください！」

イタリアはパスタが置いてあるテーブルへと走り、ドイツはイタリアを追いかけ、日本は二人になんとか追いつこうとしていた。

スペイン「おっ、チュロスや！」

ローマーノ「おい！スペイン待ちやがれ！！」

スペインはチュロスを見つけて、嬉しそうに走って行った。ローマ
ーノがスペインを追いかける。

ローマ「まったく…シチリアーノ、お前からも注意してくれ。」

返事はない。

ローマ「？シチリ…！？」

ローマ「ローマが後ろを振り返った、が…」

ローマ「ローマシチリアーノ！！何処に行った！？」

四人「えっ！？」「」

枢軸トリオ&スペインはローマの言葉を聞いて、ようやくシチ
リアとはぐれてしまったことに気づいたようだ。

イタリア「ヴェ…シチリアーノ（泣）」

ドイツ「イタリアーノ！！お前が勝手に走り出すからだぞ！」

日本「まあまあ、ドイツさん。取り敢えず今はシチリアさんを探しましょう。」

ドイツ「…そうだな。」

三人はシチリアを探しに行こうとした。

スペイン「まあ、待ちい。」

スペインが三人を引き止めた。

日本「何でしょうか？スペインさん。」

スペイン「シシリーならたぶん大丈夫や。たまには一人で好きに行動させてみるのもええと思うで？な、ロマーノ」

四人がロマーノを見る。

ロマーノ「…俺もスペインに賛成だ。」

軽く視線を反らしながらロマーノもスペインの案に賛成した。

スペイン「なら、シシリーに」自由に行動してええよ」「ってメール送っとくな。」

シチリアside

私『お兄ちゃん達、何処行っただろう?』

お兄ちゃん達とはぐれてしまった私は、一人うつろうつろしていた。

）
）

と不意に鏡 リン&鏡 レンの「からくりせばーすと」が流れ出した。

私『あつ、メールだ。』

私はケータイを取りだしメールを確認した。

私『なになに…』

>シシリーへ
ごめんな。

親分達、勝手に動いてシシリーとはぐれてしもた。

だからシシリーも親分達を気にせずに動いてええよ

帰りにまた合流しような。何か困ったことがあったら、メールし
い。すぐに駆けつけるで

ほな、またな。スペイン親分よりく

…じゃあ、お言葉は甘えてあっちこっち行かせて貰おうかな。
』

ケータイを閉じると私は特に目的もなく、歩き始めた。

特別話 クリスマスパーティー その1（後書き）

もしかしたら、クリスマスが終わるまでに終わらないかもしれないかもしれません。

すみません m (_ _) m

特別話 クリスマスパーティー その2（前書き）

短いです。

新キャラが3人出ます。

特別話 クリスマスパティー その2

シチリア『さて、と。どうしようかな…』

一人で行動することになったシチリアは何をするか迷っていた。

シチリア（誰かいないかな？）

その場でキョロキョロとするシチリア。

??「あら、シシリーじゃない。」

??「あなたが一人でいるなんて珍しいですね。どうしたんです？」

??「ヴェストやスペイン達と一緒にじゃなかったのか？」

話し掛けられてシチリアは振り向いた。

シチリア『あつ…こんばんはハンガリーさん、オーストリアさん、
プロシア兄さん。』

振り向くとハンガリー、オーストリア、プロイセンが立っていた。

ハンガリー「こんばんは、シシリー　でも本当に珍しいわね？　あなたが一人なんて。」

ハンガリーもオーストリア同様に、普段はイタリア兄弟のどちらかと行動しているシチリアが一人でいることに疑問を感じ、聞いてきた。

シチリア『実は　>説明中<　ということでした。』

オーストリア「あなたも大変ですね。」

額に手をやり、シチリアに同情の眼差しをおくるオーストリア。

シチリア『でもまあ…楽しい…ですよ？』

プロイセン「ケセセセセ…まっ、頑張りな。」

プロイセンがシチリアの頭をワシャワシャと撫でた。

シチリア『みゅー…あっ！（バツ）』

シチリアは慌てて口を手で覆った。

プロイセン「おっ シシリーのその声、久しぶりに聞いたな。」

シチリア『……聞かなかったことにして下さい……。』

恥ずかしそうにシチリアは顔を赤らめながら俯いた。

ハンガリー「あら、私は好きよ シシリーのその声。」

シチリア『……………。』（顔がトマト状態）

ハンガリーの言葉に余計に恥ずかしがるシチリア。

オーストリア「ハンガリー、シチリアが困っているじゃないですか
…（汗）」

シチリア『オーストリアさん…』

オーストリアがシチリアに助け船を出す。

オーストリア「さあシチリア、そろそろ行きなさい。久しぶりに一人になったんですから、私達だけでなくもつと沢山の方と話してみなさい。」

オーストリアがシチリアに優しく微笑みかける。

シチリア『はい！じゃあハンガリーさん、オーストリアさん、プロシア兄さんまた今度。』

ハンガリー「またねシシリー」

プロイセン「暇だったら遊びに來い（ハンガリー「行かなくて良いからね」何でだよ！？」

オーストリア「プロイセン、あまり騒がないで下さい。お下品です。…ではシチリア、また今度。」

シチリア『あはは…（苦笑）では、さよなら。』

シチリアは手を振りながら三人の元から去った。

特別話 クリスマスパティー その2（後書き）

次話は新キャラが1人しか出ません。

特別話 クリスマスパーティー

その3 (前書き)

新キャラが1人出ます。

特別話 クリスマスパーティー その3

シチリア『あっ…あれは…』

シチリアは友人を見つけ、その人の元へ走って行った。

シチリア『ポーランド君！』

ポーランドはいきなりシチリアに後ろからポンと肩を叩かれビクツとしたが、相手がシチリアだと気付くと笑顔になった。

ポーランド『あっ！シチリアだしー！！良かったしー。ってシチリア一人？珍しくない？』

ポーランドはシチリアにハグしてきて、それからシチリアに聞いできた。

シチリア『うん、色々あってね。ポーランド君も一人？』

ポーランド『う、ううん。本当はリトとエストとラトも一緒やったんやけど、あいつら俺を置いてどっか行っちゃったんだしー！マジありえんくない？』

シチリア『そ、そっか…。』（苦笑）

口を尖らせて話し「リトのバカーー！」と叫ぶポーランドにシチリアは苦笑いした。

ポーランド「しかもここにおるやつ、皆知らん顔ばっかだから俺、動けんで困つとったんよ。でも、シチリアが来てくれて助かった。…良かったら一緒に三人探してくれん？」

人見知りが激しいポーランドはシチリアの服をつい、と引っ張り、上目遣いをお願いしてきた。

シチリア『良いよ（ポーランド君、可愛い…。）』

シチリアはにこりと優しく微笑んだ。

ポーランド「やったー！シチリア大好きだしー！！」

ポーランドはピョンとその場でジャンプして、そのままシチリアに再びハグをした。

シチリア『よしよし…じゃあ、行こうか？』

シチリアはポーランドにスツと手を差し出した。

ポーランド「うん！！」

ポーランドも嬉しそうに手を取る。

シチリア『ふふ……。』

ポーランド「？シチリア、何で笑つとるん？」

シチリア『何でもないよ』

ポーランド「ふん…ま、いつか さつさとリト達見つけよう。」

ポーランドに手を引かれ、シチリアも歩き出した。

シチリア（弟って、こんな感じなのかな？）

そして二人のバルト三国捜しが始まった。

特別話 クリスマスパティー その3（後書き）

短くてすみません…

今更ですが、皆の服を考えてませんでした…本当にすみません（<ー>。）

取り敢えず皆、それぞれの国の正装をしていると思ってください。
（女性陣は皆スカート）

特別話 クリスマスパーティー その4（前書き）

すみません！！

クリスマス、思いっきり過ぎちゃいました。

なんかいつの間にか【バルト三国を探せ！！】的なことになった
やいました…

特別話 クリスマスパティー その4

バルト三国を捜しはじめて早1時間…

ポーランド「…おらんしー。」

シチリア「…3人共、見当たらないね。お兄ちゃん達からの連絡も無いし…」

シチリアは現在の状況を簡潔にまとめて兄達へメールし、『もしバルト三国を見つけたら連絡をして欲しい』と伝えていた。しかし、まだ誰からも連絡は来ていなかった。

ポーランド「俺、怖いのが我慢して捜しとるのに…あいつら何処にいるん！ー」

ポーランドはその場で地団駄を踏んだ。

シチリア「まあまあ…でもあんなに色んな人に聞いたのに見つからないなんて、本当に何処にいるんだろうね？」

………

.....

「回想」

.....

...

【アジア組に聞いてみた】

中国「バルトの連中あるか？悪いけど我は見えないあるね。...お前達、バルトのやつら見なかったあるか？」

年長者である中国が他のアジアのメンバーに聞く。

マカオ「私もミスター同様、見かけていません。」

香港「俺も見えない的な。」

台湾「私も見てないヨー。ベトナムは？」

ベトナム「私も見ていない。」

韓国「俺も見えないんだぜ！ちなみにクリスマスの起源は俺なんだぜ！...」

中国「ちげえある！！」

クリスマスの起源を主張する韓国に中国が突っ込む。

シチリア『そうですか…ありがとうございました。次を当たろうか、ポーランド君。』

ポーランド『…うん。…サンキュー……。』

ポーランドは人見知りを発動しており、シチリアの後ろに隠れていた。

二人はアジアのメンバーにお礼を言い、背を向けた。

韓国「あっ！シチリア、待つんだぜ！！」

韓国がシチリアを呼び止めた。

シチリア『？何ですか？韓国さん。』

足を止め、不思議そうな顔をしながら振り返るシチリア。

韓国「胸揉ませるんだぜ！！」

シチリア『えっ！？』

韓国が両手を挙げてシチリアに迫る。すると…

ポーランド「こ、これ以上シチリアに近づいたらポーランドルール発動でお前の首都がワルシャワになるしー!」

先程までシチリアの後ろに隠れていたポーランドが手を腰にあて、韓国からシチリアを守るようにして間に立った。

ポカツ x 5

韓国「あいごー!?!」

皆に殴られ、奇声をあげる韓国。

中国「あいやー! すまねえあるな、シチリア。韓国は我が後で絞めとくある。」

マカオ「私達も手伝いますよ。」

香港「You達は気にせず人捜しをkeepしてていい的な。」

台湾「バルトの人達、早く見つかるといいネ」

ベトナム「もしバルト三国の誰かを見掛けたら、すぐに連絡をしよう。」

シチリア『あ、ありがとうございます。でも、韓国さんの指導はほどほどにしてあげて下さいね?』

韓国「シチリア…（キラキラ）」

台湾「シチリア、甘やかしたらダメだよ!」

ポーランド「行こう、シチリア。」

…

…

「回想終了」

…

…

シチリア『あの時はありがとうね、ポーランド君。おかげで助かったよ。』

ポーランド「へへ…別に俺にかかればあれぐらいどつてことないしー」

.....

.....

「回想」

.....

...

【北欧組に聞いてみた】

デンマーク「え？バルトの連中？うーん…俺は見えてないっぺな。大親友、おめえはどうだっぺ？」

ノルウェー「あんこうざい。…俺も見えてねえべ。」

アイスランド「僕も見えてない。」

パフィン「俺も見えてねえなあー。」

シチリア『そうですか…ところで、フィンランドさんとスウェーデンさんは一緒にじゃないんですか？』

いつもなら北欧メンバーは5人（と1羽）一緒に居るのに今、ここに居るのはデンマーク、ノルウェー、アイスランド、パフィンの3人（と1羽）だけだった。

デンマーク「ああ、あいつらは(???)」ママは今日、お仕事があるから来れないって言ってたですよ!」おお! シーランド、スヴェーリエ」

後ろを向くと、シーランドとシーランドを肩車したスウェーデンが立っていた。

シチリア『Buonasera。スウェーデンさん、シーランド君』

スウェーデン「ん。」

シーランド「Good eveningなのですよ、シチリア!」

スウェーデンは片手を軽く挙げ、シーランドはピョンとスウェーデンの肩から飛び降りて、スタタタツとシチリアの元へ駆けてきた。

ポスッ…

シチリア『おっ、と。』

シーランドを受け止めるシチリア。

ニコッ、と笑うシーランド。そんなシーランドにシチリアも微笑みかける。

シチリア『そっか。フィンランドさん、お仕事なんだ。』

シーランド「はいなのですよ。本当は一緒に来たかったんですけど「今夜のお仕事はとっても大事なものだから。」って断られちゃいました…。何のお仕事なんですかね？」

腕を組んで首をひねるシーランドを見て、シチリアは微笑んだ。

シチリア『ふふ、そうだね。…でも、きっと凄いお仕事をしてると思うよ?』

シーランド「凄いお仕事ですか?」

シチリア『うん、きっとね。(なでなで)』

シチリアはしゃがんで視線をシーランドに合わせ、頭を優しく撫でた。

シーランド「く、くすぐったいですよ!それにシー君は子供じゃないですから、そんなことされても嬉しくなんか…。」

そう言いながらもシチリアに撫でられて、とても嬉しそうなシーランド。

クイツ…

シチリア『ん?』

ポーランド「……シチリア…。」

ポーランドが上目遣いでシチリアを見ながら服を引っ張った。

シチリア『あつ…そうだったね。シーランド君とスウェーデンさん、バルトの人達を見掛けませんでしたか?』

シーランド「ラトビア達ですか? シー君達は見えてねえですよ。ですよね、パパ。」

スウェーデン「んだ。」

シチリア『そうですか…ありがとうございました。他を当たってみます。』

デンマーク「早く見つかるといいいな。」

ノルウェー「あんこ、今から10秒で捜してこい。」

デンマーク「んなこいできないっぺー!」

ノルウェー「あんこうっぜ…。」

さらつと無茶苦茶なことを言い出すノルウェーにデンマークが思わず声を裏返して叫ぶ。

シチリア『あはは…（苦笑）』

アイスランド「見掛けたら、知らせてあげないことも…ない。」

パフィン「はっ！素直じゃねーな！…！」

アイスランド「パフィンは黙ってて。」

パフィン「へいへい。」

シチリア『ありがとう、アイスランド君。…では皆さん、良いクリスマスを。』

…

…

「回想終了」

…

…

シチリア『今からは、片っ端から聞いてみようか。』

ポーランド「…俺も聞かなきゃダメ？」

シチリア『私が聞くから大丈夫だよ。ポーランド君は私からはぐれないようにしてて。あと、バルトの皆さんがいないかキョロキョロしててね。』

ポーランド「うん！分かった！！」

ポーランドは大きく頷いた。

シチリア『行くよ。』

シチリアとポーランドはバルト三国捜しを再開した。

特別話 クリスマスパーティー その4（後書き）

今年中にはクリスマスシリーズ、終わらせたいです。

特別話 クリスマスパーティー その5（前書き）

クリスマス、だいぶ過ぎましたがクリスマス編です。

特別話 クリスマスパーティー その5

【色んな国に聞いてみた】

スイス「バルト達であるか？見ていないのである。」

リヒテンシュタイン「私も見ておりません。」

セーシェル「バルト三国ですか？見てないっすね。」

モナコ「結構前にあそこに居るのを見掛けたぞ。」

シチリア『情報、ありがとうございます。』

ギリシャ「俺は……見て……ない……。」

エジプト「……………。」(ふるふる

トルコ「俺はさっき、向こうで見たぜ。」

シチリア『本当ですか!?!』

ギリシャ「げっ……トルコ……」

トルコ「ああん？俺がいたら何か悪いことでもあんのかよ？」

ギリシャ「凄く……ある。」

トルコ「んだとー！」

シチリア『お二人とも、ケンカは……』

エジプト「……。（シチリアとポーランドの背中を押す）」

シチリア『エジプトさん？』

エジプト「……。（ポンと拳で自分の胸を叩く）」

シチリア『……お任せしますね。』

キューバ「俺は見えてねえぜ。」

カナダ「僕も見えてないです。」

クマ二郎／ポーランド「誰？」「」

カナダ／シチリア「『カナダ（さん）だよー！』」

ベルギー「バルトのメンバー？うん…うちは見てないわぁ。」

オランダ「……………。（ふるふる）」

インド「えっ？バルト三国？見とらんなぁ…。」

フランス「お兄さんは見てないなぁ。そんなことよりシシリー、お兄さんと一緒にワインでも飲まない？」

ポーランド「そんなことってひどくない！！」

フランス「あ…ごめんごめん。」

シチリア『私達にとっては大事なことで…それに私、アルコールはちよつと……………』

フランス「え〜！一杯だけでもダメ？」

シチリア『いえ。ですから私、アルコールは…』

イギリス「おい、フランス！シチリアが困ってんだろぅが。」

シチリア『あつ、イギリスさん。』

フランス「なんだよイギリス？邪魔すんなよ。」

イギリス「いや、明らかにお前がシチリアとポーランドの邪魔してんだろ！」

ポーランド「なあ、イギリスはリトアニア達見とらん？」

イギリス「リトアニア達？悪いけど見てないな。」

シチリア『そうですか…。』

イギリス「け、けど見たらお前達に知らせに行つてやらないこともない。…べ、別にお前達の為じゃないんだからな！俺の為なんだからな…！」

シチリア『ふふつ…ありがとうございます。（ニコッ）』

イギリス「／／／俺は紳士として当ぜ（アメリカ「くたばれイギリス…！」ぐおっ…？」）

シチリア『イギリスさん！？』

アメリカ「やあ！シチリアにポーランド。楽しんでるか？」

ポーランド「まあまあかな。アメリカ、リトアニア達見とらん？」

アメリカ「リトアニアかい？うん…俺は見えてないぞ。」

ポーランド「そっか…残念。」

アメリカ「H A H A H A　そう落ち込むなって！」

イギリス「アメリカ…てめえ何しやがる！！」

アメリカ「なんだいイギリス？君、いたのかい？」

フランス「お兄さんも気づかなかつたな。」

シチリア「…さっきアメリカさん、思いっきり「くたばれイギリス！！」って叫びながらイギリスさんに飛び蹴りしてましたよね？（苦笑）」

アメリカ「何のことだい？」

イギリス「てめえら！後でどうなるか分かってんだろうな？」

アメリカ「イギリスなんて怖くないんだぞ。」

フランス「アメリカ、加勢するよ。」

ポーランド「何かめんどくさそうだから行こう、シチリア。」

シチリア「止めなくていいのかな？」

ポーランド「多分、止められんと思うよ?」

ギャーギャーギャー

ワーワーワー

シチリア『だね。え〜と…私達、急いでいるので失礼しますね?』

ルーマニア「おいらは見えないよ。」

ブルガリア「あっ！俺、さっき向こうでロシアさん達と一緒に居るの見たよ。」

シチリア『有力な情報、感謝します!』

（申し訳ありませんが、時間の都合上省略させていただきます。）

シチリア『あと聞いてないのはロシアさん、ベラルーシさん、ウクライナさんだね。』

シチリアはパーティーの参加者をメモした紙に×印をつけながら呟いた。

ポーランド「ロシアかあ……何かやだなあ……」

シチリア『そんなこと言わないの。(ツン)』

シチリアはポーランドの額を小突いた。

ポーランド「うー…だってあいつ、何考えとるか分からんもん！」

シチリア 「ロシアさん、優しいよ?」

ポーランド「えー！？」

ポーランドはシチリアの言葉を聞き、驚いたように声をあげた。

「シチリア『さあ、早くロシアさん達をさが(??)『うわぁー！！』??』ラトビアアアー！！』??今の声って…。」

ポーランド「ラトとエストニアの声だしい！」

シチリアとポーランドは顔を見合せた。

シチリア『向こうからだね！』

ポーランド「うん！！」

二人は手を繋いで、ラトビアとエストニアの声がした方へと走って行った。

特別話 クリスマスパーティー その6

シチリア side

ラトビア君とエストニアさんの声がした方へ行ってみると、そこには……予想通りの光景があった。

ロシア「うふふ（ギュツギュツ）」

ラトビア「ち、縮んじゃうー!!」

エストニア「ラトビアアアーーーー!?」

ロシアさんが笑顔でラトビア君の頭をギューツと押さえつけていて、ラトビア君は涙目になり、それを見たエストニアさんが叫んでいた。

ポーランド「リトがおらん…。」

ポーランド君が残念そうに呟く。

ロシア「やあ、シチリアちゃん、ポーランド君。」

私達に気がついたロシアさんがラトビア君の頭の上に手を乗せたまま、挨拶をしてきた。

私「えっと… Buonasera、ロシアさん。」

私も少し戸惑いながらも、挨拶を返した。

「……うん、アゲトシ」

ロシアさんの手は依然として、ラトビア君の頭の上に乗っけられている。

ポーランド「ロシア！ラトを離すしー！」

ロシア「え……どうしようかな?」(ギョッ)

「ラトビア、うわああー！」

エストニア「ラトビアアアアーーーー!?」

ロシアさんはニコニコと笑いながら、ラトビア君をさらに押さえた。

悲鳴をあげるラトビア君とエストニアさん。

私『あの、ロシアさん。それ以上やったらラトビア君が潰れちゃう
そうなので、止めてあげて下さい。（苦笑）』

ロシア「うーん…シチリアちゃんがそう言うなら、良いよ。」

私が苦笑してロシアさんに頼むと、ロシアさんはラトビア君を解
放してくれた。

ラトビア「ふう…。」

グイッ

なでなで

ラトビア「へ?」

私はラトビア君を自分の方に引き寄せ、頭を優しく撫でた。

私『ありがとうございます、ロシアさん。』

私はぺこりとロシアさんに頭を下げた。

ロシア「うっん あっ、そっだシチリアちゃん。」

私「何でしょうか？」

ロシア「今度シチリアちゃんの家遊びに行っても良いかな？（ニコッ）」

ロシアさんがポンと私の肩に手を置いて、聞いてきた。

二人「「ひっ!?!」」

それを見たエストニアさんとラトビア君の顔が青ざめる。

私「ええ 構いませんよ。」

三人「「えっ!?!」」

ポーランド君、エストニアさん、ラトビア君の三人は驚いた表情で私を見た。そして私はたった今、ロシアさんの後ろに来た二人の人物にも声を掛けた。

私「よかったら、ベラルーシさんとウクライナさんも来てください。歓迎しますよ。（ニコッ）」

ロシア「えっ！？……」

ロシアさんは血相を変えて、ゆっくりと後ろを振り向いた。

ウクライナ「ありがとう、シチリアちゃん。」

ベラルーシ「ねえ兄さん、結婚しましょう……結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚……。」

ロシア「来ないでえええ……！！！！！！（泣）」

ベラルーシさんはロシアさんと目があつた瞬間、何かの書類を出して、ロシアさんに迫ってきた。

ロシアさんは悲鳴をあげて、何処かへ走って行ってしまった。

ベラルーシ「待つて！！兄さん！！……結婚結婚結婚結婚結婚……。」

ウクライナ「待つてえー！ベラルーシちゃん、ロシアちゃん！！」

ベラルーシさんはすぐにロシアさんを追いかけ始め、そんな二人をウクライナさんが追いかけていった。

四人「『……………。』」

私達四人は茫然とその背中を見送った。
暫くして、ラトビア君がハツとしたように私の方を向いた。

ラトビア「あ、あの…シチリアさん。」

私『?なあに?ラトビア君。』

私は屈んで、ラトビア君と目線を合わせた。

ラトビア「そ、その…さっきはありがとうございました。」

ラトビア君は少し顔を赤らめ、ぺこりと私に向かって頭を下げた。

シチリア『どういたしまして。…でもどうして、ああいうことになつてたの?』

エストニア「いつもと同じですよ。ラトビアがロシアさんに爆弾発言をしたんです。」

私がラトビア君に質問すると、エストニアさんが答えてくれた。

シチリア『あはは…(苦笑。ラトビア君、気を付けないとダメだよ?』

ラトビア「はい…。」

ラトビア君はしょぼんとして、俯いた。

ポーランド「なー、ラトとエストニアはリトと一緒にじゃないん？」

ポーランド君は二人の袖を引っ張った。

ラトビア「え？リトアニアさんなら、ポーランドさんを探しに行くって言ってましたよ。」

エストニア「会ってないんですか？」

シチリア『私、ポーランド君とずっと一緒に行動してましたけど、会ってませんよ。』

私が答えると、二人は顔を見合せて、首をひねった。

ポーランド「……リト……。」

ポーランド君は俯き、寂しそうに呟いた。
皆が黙り、重い空気になりかけたその時

）
）

三人「「!？」」

私「あつ…メールだ。」

私のケータイから着メロ（初 ミクの「ローリングール」）が流れてきた。

エストニア「誰からですか？」

エストニアさんが私に尋ねる。

私「えつと…日本さんからですね。」

> シチリアさんへ

リトアニアさん、見つかりましたよ。

只今、GPSを使ってそちらに向かっています。
その場で待機しておいて下さい。

日本より<

…とのことです。良かったね ポーランド君。』

ポーランド「う(??)」「ポーランドー!!」「え!?!」

ポーランド君が私からの報告を聞き、頷こうとしたその時、後ろから誰かが名前を呼んだ。

特別話 クリスマスパーティー その6（後書き）

クリスマス編はあと1話だけ続きます。

今週中には投稿したいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2776y/>

転生先は...ヘタリアの世界!?

2012年1月14日15時47分発行